

3. 東京都私立高校入試の動向

「2023 年度（R5） 都内私立高入試の概況」

株式会社創育／新教育 林 真人 氏

2023（R5）年度 都内私立高入試の概況

株式会社創育／新教育

1. 募集校数と募集人員

① 募集校数と共学化

2023（令和5）年度の都内私立高入試の外部募集校は前年度から増減なく182校でした。

日本音楽が女子校から共学に改編，校名を「品川学藝」に変更したうえ普通科を新設，東京女子学園は女子校から共学に改編，校名を「芝国際」に変更，自由ヶ丘学園は男子校から共学に改編，鶴川は校名を「フェリシア」に変更しました。

② 募集人員

男女校別の募集校数と募集人員は次の通りです。

表1 男女校別募集校数と募集人員

区分	2023年度		2022年度		増減	
男子校	17	2,378	18	2,641	-1	-263
女子校	42	7,299	44	7,631	-2	-332
男女校	123	27,294	120	26,993	+3	+301
計	182	36,971	182	37,265	±0	-294

③ 入試区分別募集状況

推薦入試は前年度より1校減の166校で実施しました。

推薦枠の全体に占める割合は前年度から0.3ポイントダウンの43.7%でした。

表2 入試区分別募集状況

区分	推薦入試		一般入試		計	
	学校数	募集人員	学校数	募集人員	学校数	募集人員
男子校	12	898	17	1,480	17	2,378
女子校	42	3,393	42	3,906	42	7,299
男女校	112	11,857	123	15,437	123	27,294
計	166	16,148	182	20,823	182	36,971
%	91.2	43.7	100.0	56.3	-	-

④ 学科別募集人員

学科別の募集人員は次の通りです。

表3 学科別募集人員 構成比は全体の募集数に対するもの

区分	普通科	専門学科	内訳				
			商業系	工業系	看護系	家政系	その他
男子校	2,378	0	0	0	0	0	0
女子校	6,717	582	279	0	36	77	190
男女校	25,864	1,430	200	625	0	40	565
計	34,959	2,012	479	625	36	117	755
構成比	94.6	5.4	1.3	1.7	0.1	0.3	2.0

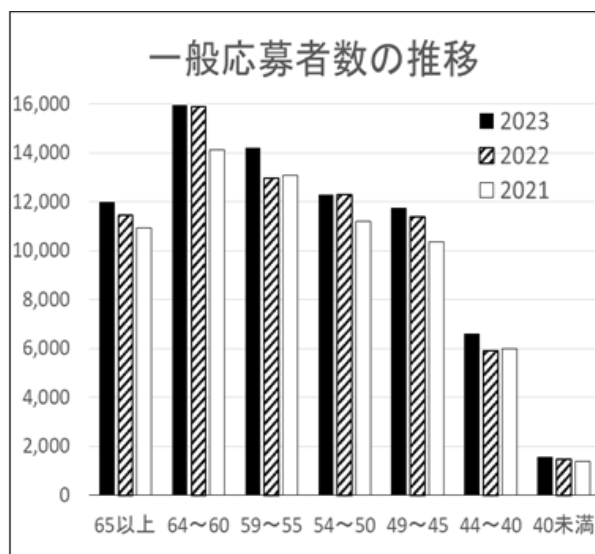
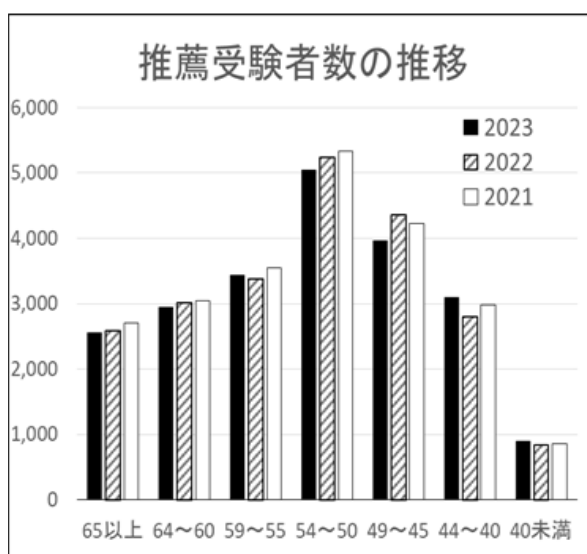
2. 学力別推薦・一般応募状況

次のグラフは、新教育調査による学力偏差値別の応募状況を推薦入試、一般入試に分けて集計したものです。

まず推薦入試から見ていくと、都内の公立中学校等卒業予定者が前年度比で約1,200人増えている中、59～55、44～40の層は受験者増、54～50、49～45の層は減、それ以外の層は概ね前年度並みとなっており、集計できた範囲の総数としては約300人減となっています。2022年12月12日時点での「都立高校全日制等志望予定（第1志望）調査」によると、都内公立中学校等卒業予定者中の「私立・国立・他県公立高校」への志望率は25.21%で前年度（25.85%）から0.64ポイントダウンとなっており、推薦入試受験者数の動きと符合します。

東京都の授業料軽減助成金制度は2017年度、2020年度に拡充が図られ、私立高校への志望率は上昇傾向にありました。そんな中、2021年度入試では、2020年春の一斉休校により学力に不安感を持つようになった層がペーパーテストによる入試を避け、内申重視の私立推薦入試へと向かいました。2023年度入試の受験生たちは中学校入学時に一斉休校を経験した世代でした。都立高入試では受検者全体に安全志向が働いたと考えられる動きがあり、学力への不安感は中学3年生進級時に一斉休校だった2021年度の受験生以上だったのではないかと思います。それにもかかわらず受験生の私立志向がさらなる進行を見せなかったのは、2022年の急速な円安・物価高が一因ではなかろうかと考えられます。助成金制度が充実したとはいえ、すべての学費が無償化されたわけではなく、都立や通信制の基本的に通学しないコースと比べると保護者の負担は重くなります。助成金制度拡充以前と比べれば依然私立志向は継続していると言えるものの、経済的不安感がそれにブレーキをかけたのではないのでしょうか。

一方、一般入試の応募者数は前年度並みか増加している学力層が多く、集計できた範囲では前年度より約3,000人増えています。これは新型コロナウイルスに対する不安感が緩和されてきたことによって受験校を増やす動きがあったものと考えられます。特に59～55の層の伸びが大きいのは、共学化を機に内申基準を大きく変えた学校が人気を集めたほか、60以上の層の前年度併願優遇で不合格者を出した学校から安全志向で59～55の層への移動があったことなどが要因として考えられます。



3. 各校の選抜状況

① 国立大附属

国立大附属は、応募者減となっているものの例年の動きの範囲内に収まっているケースや、例年以上の応募者数になっているケースが目立ちました。この学力層では中学受験経験者も多く、中学入学時の一斉休校による学力への影響は小さかったかもしれません。

筑波大学附属は男女ともに応募者微減。男子は隔年現象で倍率ダウンの年に当たりました。女子は棄権者数が26人にとどまり（前年度33人）実質倍率は前年度よりもややアップしました。

筑波大学附属駒場は2年連続で応募者減、かろうじて実質倍率3倍台を保ちました。東京学芸大学附属への流れがあったかもしれません。

<国立大附属の応募者数>

学校名	性別	2021年度	2022年度	2023年度
筑波大学附属	男子	341	418	390
	女子	213	222	217
筑波大学附属駒場	男子	176	165	150
お茶の水女子大学附	女子	381	440	392
東京学芸大学附属	男子	411	535	647
	女子	351	384	429
東京工業大科学技術	男女	251	355	411

前年度が過去10年で最多の応募者数だった**お茶の水女子大学附属**は約50人の応募者減でしたが、それでも同校としては多い数です。

一時は上昇傾向にあった受験棄権率は14.2→12.3→11.7%と2年連続で下がりました。

一時応募者数が減少傾向にあった**東京学芸大学附属**は2年連続の応募者増で1,000人を超えました。今年度は前年度から26人合格者を増やしており、同校が2019年度に導入した「入学確約書」への受験生の対応が定まりつつあるのではないかと想像されます。

東工大科学技術は2年連続の応募者増となりました。2026年4月の大岡山キャンパス（目黒区）への移転・新校舎建設に向けたスケジュールが改めて示されたことが安心材料となったかもしれません。一般入試における女子の合格者数は65人、前々年度（30人）から倍増しています。

② 都内私立高入試概況 1 難関進学校

難関男子校の状況です。次ページの表は一般入試の応募者数を過去4年分掲載したものです。

開成は前年度とほぼ同じ応募者数、ここ数年の中では多い方ですが、2016年度までは毎年600人を超えていました。**桐朋**は23人の応募者減で前々年度並みとなりました。ただし合格者数を144人（前年度163人）に絞っており、実質倍率は前年度の1.44倍から1.49倍へとやや上がりました。

城北はほぼ横ばい。本郷の高校募集停止の影響で応募者数が増えた2021年度を除くと310～330人台で安定しています。合格者数は2020年度まで200人以上出していましたが、2021年度以降は170人台で、実質倍率は高めで推移しています。

5科型入試を導入して3年目の**巣鴨**は5科型入試の応募者が約80人増、3科型入試は9人増、合格者数は5科型が172人から134人に、3科型は18人から12人にそれぞれ減り、実質倍率は5科型2.43倍（前年度1.43倍）、3科型3.50倍（前年度2.00倍）にアップ、合格最低点は440点満点の5科型が272点（前年度227点）、300点満点の3科型は195点（前年度184点）といずれも上がり、非常に厳しい入

試になったことがうかがえます。

<男子難関進学校の一般応募者数>

学校名	2020	2021	2022	2023
開成	522	498	566	565
桐朋	246	215	240	217
城北	327	360	333	340
巣鴨	149	245	298	386
計	1,438	1,318	1,437	1,508

③ 都内私立高入試概況 2 大学附属校

2023年度の中学校入試では早稲田、慶応、明治の「付属校離れ」が起きたと指摘されていますが、高校入試ではどうだったのでしょうか。次ページの表は早慶 GMARCH の附属校の推薦受験者と一般応募者の推移を過去4年間分掲載したものです。結論から言えば、高校入試において「付属校離れ」と呼ぶべき動きは特段起きていませんでした。

青山学院は一般入試日を前年度までの2/12から2/11へ変更しました。明治大学付属明治や神奈川の中央大学附属横浜との重複を避け、早稲田高等学院、中央大学、明治大学付属中野八王子、神奈川の法政大学第二と重なる日程へ移った形です。その結果、推薦入試27人11.0%減、一般入試98人9.4%減でした。推薦入試は過去5年で最も少ない人数でしたが、それ以前は200人未満で推移していたので依然人気を保っていると言えそうです。一般入試は隔年現象で倍率ダウンの年に当たり、例年の動きの範囲内と言えます。

中央大学杉並は推薦入試21人6.5%増、一般入試14人1.5%増とほぼ前年度並み、中央大学附属は推薦入試55人17.9%増、一般123人15.7%増、中央大学は推薦入試7人3.6%増、一般154人19.0%減となりました。推薦入試は3校いずれも増えており、早稲田高等学院等からの移動があったかと思われます。中央大学の一般入試には隔年現象が生じつつあり、2023年度は応募者減の年に当たりました。中央大学附属の一般が900人を超えるのは12年ぶりでした。例年これら3校間での受験生の移動があり、2023年度は中央大学から中央大学杉並へ、中央大学杉並から中央大学附属へという流れがあったのではないかと考えられます。

前年度から定員を減らしている早稲田実業は推薦入試3人2.6%減、一般入試6人0.8%減とほぼ前年度と変わらない数でした。合格者数は推薦49人→46人、一般182人→174人とそれぞれ絞ったため、実質倍率は推薦一般いずれも前年度から少しずつ上がりました。

明治大学付属明治は推薦入試12人12.6%増、一般入試200人34.4%増と、一般応募者が大幅に伸びました。青山学院の入試日変更が影響したかもしれません。

国際基督教大学は11人3.9%増、2年連続の増となっており、海外渡航に関する規制が緩和されてきたことを受けて、国際交流への期待感が高まってきているのかと考えられます。

早稲田高等学院は推薦入試40人16.4%減、一般入試48人2.6%減、推薦は過去5年で最少です。一般入試は、こちらも青山学院入試日変更の影響を受けたかもしれません。

学習院は4人2.2%の微減でしたが、合格者数を前年度の25人から36人へと増やしたため、実質倍率は前年度の5.16倍から3.64倍へと大きく緩和しました。

慶應義塾女子は推薦入試30人21.0%減、前年度の実質倍率が6倍近くなったため敬遠されたと思われます。一般入試16人3.5%増、推薦から一般へとシフトした形で、推薦一般ともに2020年度と同数の受験者・応募者数となりました。

安田理氏は、中学入試において早稲田、慶応、明治の附属校に合格する学力レベルの受験生が「併設大学以上のレベルの大学に進学できる可能性」を考慮して進学校へ向かっているのではないかと指摘しています（出典：「今年の中学入試で早稲田、慶應、明治の「付属校離れ」が起きた5つの理由」<https://jbpress.ismedia.jp/articles/-/74188>）。それに対し高校入試の場合、高校の3年間で併設大学以上のレベルの大学に進学できる学力に達することへの期待感と、併設大学への進学の実確性を天秤にかけたとき、後者の比重が依然として大きいのではないかと考えられます。また、中学からの10年間の教育費と高校からの7年間の教育費には当然大きな違いがあり、7年間の教育費で併設大学卒業までの道が開かれる附属高校にはお得感があるのではないかと考えられます。

<難関大学附属校の状況>

学校名	推薦受験者				一般応募者			
	2020	2021	2022	2023	2020	2021	2022	2023
青山学院	220	273	245	218	1,020	988	1,048	950
中央大学杉並	407	356	324	345	1,115	948	951	965
中央大学附属	303	262	307	362	646	556	785	908
中央大学	245	187	197	204	872	681	812	658
早稲田実業	132	100	116	113	1,028	843	763	757
明治大学付属明治	101	113	95	107	581	557	581	781
国際基督教大学	—	—	—	—	286	252	284	295
早稲田大学高等学院	236	235	244	204	1,850	1,507	1,848	1,800
学習院	—	—	—	—	141	143	178	174
慶應義塾女子	113	120	143	113	471	454	455	471
計	1,757	1,638	1,671	1,666	8,010	6,929	7,705	7,759

次の表も都内の上位大学附属校の状況です。これら11校の合計で見ると、推薦一般ともに受験者・応募者が増えており、実質的な進学校も含んではいますが、これらの学校を見ても「付属校離れ」は起きていません。

帝京大学高等学校は106人24.8%の減、過去10年で最少の応募者数となりました。コース改編で応募者増に成功した八王子学園八王子等へ流れたものと思われます。

明治大学付属中野八王子は推薦入試16人4.7%増、一般入試は1人減りました。一般入試はここ3年間低めの倍率で推移しています。

法政大学の推薦入試は前年度と同じ受験者数、一般入試は25人9.3%減。一般は低倍率だった前年度をさらに下回りました。

<上位大学附属校の状況(1)>

学校名	推薦受験者				一般応募者			
	2020	2021	2022	2023	2020	2021	2022	2023
帝京大学	—	—	—	—	475	382	427	321
明治大学附属中野八王子	417	362	342	358	553	445	438	437
法政大学	134	169	138	138	331	431	270	245
國學院	143	128	285	136	2,446	1,832	2,414	2,607
國學院久我山	45	65	42	68	293	296	271	301
成蹊	20	39	22	35	142	195	173	213
明治学院(推薦は応募数)	388	354	307	393	1,120	956	1,084	1,316
東京都市大学等々力	—	—	—	—	360	216	218	263
明治大学附属中野	19	24	29	126	1,158	935	987	961
芝浦工業大学附属	34	58	64	83	104	123	112	138
東京農業大学第一	103	87	94	90	661	596	750	630
計	1,303	1,286	1,323	1,427	7,643	6,407	7,144	7,432

國學院は推薦入試 149 人 52.3%減、一般入試 193 人 8.0%増、推薦の出願資格に英検準 2 級が加えられたことにより出願できる受験生が減り、一般へとシフトしました。

國學院久我山は推薦入試 26 人 61.9%増、一般入試 30 人 11.1%増となりました。推薦は過去 10 年で最多の受験者数、一般には隔年現象が生じつつあり、2023 年度は応募者増の年に当たりました。

成蹊は推薦入試 13 人 59.1%増、一般入試 40 人 23.1%増。推薦の合格者数は 24 人で実質倍率は 1.46 倍、2019 年度に推薦入試を導入して以来、全員合格となった年が 2 回、不合格者を出した年が 3 回となっています。一般の合格者数は前年度の 103 人から 72 人へと絞り、実質倍率は 2.90 倍、過去 10 年で最も高い倍率となりました。

明治学院は推薦入試 86 人 28.0%増、一般入試 232 人 21.4%増、ともに過去 10 年で最多でした。2022 年 7 月に新校舎が完成したことが効果を発揮し、朋優学院等からの移動があったと思われます。

東京都市大学等々力は 45 人 20.6%の応募者増、推薦入試を廃止した 2015 年度以降では 2 番目に多い応募者数です。

明治大学附属中野は従来実施してきたスポーツ推薦に加え、2023 年度から総合型として 3 科の適性検査と個人面接による推薦入試を導入しました。総合型の受験者数は 102 人、合格者数は 35 人で実質倍率は 2.91 倍となりました。一般入試は 26 人 2.6%の微減、一般から推薦へシフトした形になりました。

芝浦工業大学附属はこれまで男女別で男子の方が高かった推薦の出願基準を女子の方に合わせる形で統一し、検査内容を作文から小論文に切り替え、さらに数学を加えました。推薦入試 19 人 29.7%増、一般入試 26 人 23.2%増。推薦受験者は共学化した 2017 年度以降で最多、合格者数は 31 人で実質倍率は 2.68 倍、共学化以降では初めて不合格者を出しました。理工系大学附属校のメリットを生かした高大連携による STEAM 教育が評価されているものと思われます。

東京農業大学第一は推薦入試 4 人 4.3%減、一般入試 120 人 16.0%減となりました。一般は、入試日は異なるものの、國學院や日本大学櫻丘の影響を受けたかもしれません。

さらに大学附属校の状況を見ていきます。以下の大学附属校の合計を見ると推薦は前年度からほぼ変わらず、一般が増えています。

拓殖大学第一は推薦入試 50 人 26.0%減、一般入試 313 人 16.2%減、多摩地区は八王子学園八王子、八王子実践、昭和第一学園といった進学校が応募者数を伸ばしており、それに押された形です。

桜美林は前年度、進学コースの募集数を 85 人から 50 人に減らし、併願優遇において 5 科か 9 科いずれかの基準を満たすこととしていた内申基準を、5 科 9 科両方の基準を満たすよう変更したところ、併願優遇の応募者が激減していました。2023 年度は進学コースの定員を 90 人に増やし、各コースとも 9 科基準をなくしました。その結果、応募者は 62 人 7.5%増、前々年度までの水準には戻りませんでした。

明治学院東村山は推薦入試 4 人 5.5%減、一般入試 37 人 18.3%減、隔年現象があり、2023 年度は応募者減の年に当たりました。

東洋大学京北は徐々に減らしていた高校募集の定員を、前年度は 120 人から 150 人に増やしていましたが、2023 年度は 140 人とまた少し減らしました。また、一般入試 2 回目の日程を 2/11 から 2/13 に変更し、適性検査重視型の推薦（単願推薦 B）および入試結果重視型の併願優遇（併願優遇 B）の内申基準を緩和しました。その結果、単願推薦 B は前年度の 37 人から 68 人へ、併願優遇 B は 38 人から 154 人へと増えたほか、一般 2 回目の併願優遇を用いない応募者が 136 人から 336 人へと大きく増えており、日程や基準の変更がいずれも応募者増につながった形です。

<上位大学附属校の状況（2）>

学校名	推薦受験者				一般応募者			
	2020	2021	2022	2023	2020	2021	2022	2023
拓殖大学第一（推薦はⅠのみ）	134	128	192	142	1,678	2,068	1,927	1,614
桜美林	—	—	—	—	1,542	1,544	825	887
明治学院東村山	67	60	73	69	226	169	202	165
東洋大学京北	165	112	83	132	646	374	450	941
駒澤大学	357	318	309	311	887	711	765	721
成城学園	44	55	35	36	147	148	122	208
東京電機大学	49	52	33	32	238	249	199	244
多摩大学目黒	58	69	80	77	302	319	343	329
専修大学附属	332	239	225	237	568	372	415	485
計	1,206	1,033	1,030	1,036	6,234	5,954	5,248	5,594

駒澤大学は推薦入試微増、一般入試 44 人 5.8%減、推薦一般ともに本来の内申基準を満たしていても可とする特例条件を追加しましたが、応募状況への影響は大きくなかったようです。

成城学園は前年度から推薦入試において 3 年次の内申点のみを評価の対象としたことで少なめの受験者数となっています。一般入試は 86 人 70.5%増、200 人を超えるのは 11 年ぶりです。一般の合格者数は前々年度から 39 人→43 人→46 人と増えており、都立との併願者がやや増えているのかもしれませんが。

東京電機大学は併願優遇に、近隣地域の中学校出身者に対し内申基準を低く設定する優遇制度を導入しました。その結果、一般応募者は 45 人 22.6%増で前々年度並みに戻りました。

多摩大学目黒は推薦入試における内申点への加点の対象から数検、漢検を外し、英検のみとしましたが受験者数は3人減にとどまっており、影響は小さかったと言えます。

専修大学附属は男子の方を多くしていた募集定員を、2023年度から男女同数に変更しました。また、推薦入試の9科基準を緩和しました。基準を緩和した推薦は12人5.3%増で前々年度の人数に届きませんでした。内申基準を変えていない一般は70人16.9%増、一般の増加幅の方が大きく、受験生が推薦から一般へとシフトしている傾向がここにも見えます。

次に日本大学系の高校を取り上げてみましょう。8校の合計では、前年度比で推薦は受験者がやや減り、一般は応募者数が増えており、推薦から一般へのシフトという今年度の全体的な傾向と同じように見えます。しかし前年度は大学の不祥事の影響もあってか推薦一般ともに大幅な減となっていたところであり、今年度はその反動が起きなかったと言えます。

日本大学第一は推薦入試18人25.7%増、一般入試24人13.8%減。一般入試では128人の合格者を出し実質倍率は1.14倍、同校としては緩やかな入試となりました。

日本大学第二は推薦入試10人9.3%減、一般入試30人8.3%減、日本大学第三は推薦入試2人減、一般入試6人減と、いずれも小幅な動きながら減っています。

日本大学櫻丘は推薦入試36人13.2%減、一般入試55人7.2%増、推薦から一般へとシフトする動きがありました。推薦の受験者数は2018年の大学の不祥事の影響を受けた2019年度とほぼ同数となりました。英検、数検での加点項目を増やしましたが、受験者増にはつながりませんでした。

日本大学鶴ヶ丘は推薦入試26人12.0%減、一般入試33人8.9%増、こちらも推薦から一般へとシフトしました。推薦受験者が200人を下回ったのは7年ぶりでした。

<日本大学系の状況>

学校名	推薦受験者				一般応募者			
	2020	2021	2022	2023	2020	2021	2022	2023
日本大学第一	108	89	70	88	170	136	174	150
日本大学第二	104	133	108	98	387	376	360	330
日本大学第三	86	82	82	80	130	76	110	104
日本大学櫻丘	252	379	273	237	1,021	931	764	819
日本大学鶴ヶ丘	261	279	217	191	525	490	372	405
日本大学豊山	278	431	250	224	290	417	276	264
日本大学豊山女子	239	293	191	167	96	81	82	62
目黒日本大学(日出)	218	223	170	240	478	456	240	645
計	1,546	1,909	1,361	1,325	3,097	2,963	2,378	2,779

日本大学豊山は推薦入試26人10.4%減、一般入試12人4.3%減、推薦一般ともに過去5年で最少となりました。日本大学豊山女子はA特進の推薦及び併願優遇の5科基準を上げたうえで3科基準の選択肢を追加、N進学と理数Sの加点上限を下げ、加点項目も減らしました。その結果、推薦入試24人12.6%減、一般入試20人24.4%減となりました。

目黒日本大学の募集定員は前々年度から 315 人→245 人→210 人と縮小しています。推薦入試 70 人 41.2%増、一般入試 405 人 168.8%増、推薦は日本大学櫻丘からの移動もあったかもしれません。一般は 2 回目 (2/12) の応募者が前年度の 93 人から 303 人へと特に著しい伸びになっており、新型コロナウイルスへの不安感が緩和した受験生が併願優遇での合格を確保したうえで受験する学校として選ばれたのではないかと思われます。推薦の合格者だけで定員を超えていたため、併願優遇を利用しない一般入試での N 進学の合格者数は 2/10 が 8 人、2/12 が 15 人と絞られ、実質倍率は 2/10 が 25.00 倍、2/12 が 17.20 倍という非常に厳しい入試となりました。

④ 都内私立高入試概況 3 共学化

本稿冒頭で述べた通り、2023 年度は 3 校が共学化されました。また、2024 年度には蒲田女子が共学化し校名を「羽田国際」とするほか、現在男女別学での教育を行っている自由学園の高等部が共学化、さらに 2026 年度には日本学園が明治大学の系列校となり校名を「明治大学付属世田谷」に変更したうえで共学化予定と、共学化の流れは止まっていません。今年度共学になった学校と、ここ数年で共学化した学校の入試状況を見ていきましょう。

東京女子学園から校名変更の芝国際は、最難関選抜、難関選抜、特別進学、国際生の 4 コースに改編し、内申基準を大幅にアップ、インターナショナルスクールとの連携、海外研修プログラム、海外大学への進学サポート等、国際色を前面に打ち出しました。その結果、推薦入試受験者は 99 人、不合格者はなく、推薦一般合計の定員とほぼ同数になりました。コース別では最難関選抜の 38 人が最多でした。一般入試の応募者は 659 人、合格者は 322 人で実質倍率は 1.67 倍でした（併願優遇、フリー等すべての制度を合算した値）。

日本音楽から校名変更の品川学藝は共学化と同時に普通科を新設、4 コースあった音楽科も 2 コースに再編しました。内申基準は前年度の音楽科と同じものを普通科でも採用しました。その結果、推薦入試は音楽科だけで前年度を超える受験者数、普通科の受験者数は 43 人で、推薦一般を合わせた定員を超えました。一般入試も音楽科は前年度を超える応募者数、普通科も 91 人の応募者を集めました。特に男子においては、オール 3 未満の内申点で推薦や併願優遇の基準を満たす普通科が極めて少なく、共学化・普通科設置によってその需要に応えた形になりました。

自由ヶ丘学園は前年度にコース改編を行ったうえで 2023 年度共学化、一般入試 3 回目の日程を 2/13 から 2/12 に変更、併願優遇の内申基準を推薦に合わせる形で緩和しました。その結果、推薦入試の受験者数は前年度の 4 倍、合格者数は 336 人で推薦一般合わせた定員 270 人を大きく上回りました。内申基準を満たさずに出願できる推薦 2 で不合格者が出ているものと思われます。一般入試応募者も前年度の 4 倍以上となり、合格者数は 774 人、学力層の近い都立高の倍率も高い地域であることから入学者が定員を大幅に超過する事態が懸念されます。

共学化 2 年目のサレジアン国際学園は推薦一般ともに順調な伸びとなっています。推薦入試受験者 40 人中男子は 14 人、女子の受験者数だけ見ても共学化以前より増えており、共学化によって女子校を敬遠する女子からも選ばれるようになってきていることがわかります。

共学化 3 年目の八雲学園は 2021 年度共学化とともに内申基準をアップしたところ推薦受験者が減っ

てしまいましたが、その後は基準据え置きで2年続けて11人の受験者を確保しています。2023年度の一般入試はフリーでの応募者が増加しました。

2020年度に共学化した品川翔英は共学化2年目の2021年度に大幅な定員超過となったため、2022年度は定員を減らし、内申基準を上げたうえ、募集要項に推薦一般ともに受験者数が定員を超えた場合、内申基準を満たしていても合格は確約しないと明記することで応募者を抑制していました。新校舎の使用を開始する2023年度は再び定員を増やし、募集要項から不合格者を出す可能性を明記した文を削除しました。また、理数選抜コースを難関進学コースへと改編し、一般入試の科目を数英から国数英に変更しました。その結果、推薦入試受験者は前年度と同数、一般入試は93人28.0%増となりました。前年度の推薦・併願優遇で結局不合格者を出さなかったことが安心材料になったと思われます。

同じく共学化4年目の武蔵野大学は共学化初年度の2020年度に高校募集人員250人を大幅に上回る400人以上の入学者を迎えたことから、翌年本科コースの基準をアップして応募者減、2022年度は各コースの基準を5科のみに絞ってややハードルを上げたものの推薦一般ともに増、2023年度は一般入試において英検等の資格による英語試験得点の保証制度を導入し応募者は43人16.1%増となりました。

このように、共学化によって入学者数が急増すると次年度以降の内申基準や定員等を変更せざるを得なくなるケースがあり、2024年度入試に向けては2024年度共学化予定の学校だけでなく2023年度以前に共学化した学校についても募集要項を注視する必要があります。

<共学化した学校の状況>

学校名	推薦受験者				一般応募者			
	2020	2021	2022	2023	2020	2021	2022	2023
芝国際（東京女子学園）	5	14	9	99	13	22	13	659
品川学藝（日本音楽）	41	38	62	113	37	18	33	131
自由ヶ丘学園	103	147	95	382	595	464	278	1,187
サレジアン国際学園（星美）	19	11	27	40	11	4	17	33
八雲学園	11	6	11	11	8	20	23	34
品川翔英	103	417	74	74	416	1,285	332	425
武蔵野大学	308	114	148	147	436	214	267	310

⑤ 都内私立高入試概況 4 進学校

次に進学校の状況を見てみましょう。まず23区の学校です。

錦城学園は内申基準を「3科かつ5科」から「3科または5科」へと緩和し、推薦入試41人33.9%増、一般入試83人33.9%増となりました。東洋は前年度総進を募集停止、特選と特進の推薦基準を上げたところ推薦、一般ともにほぼ半減していましたが、2023年度は特進の併願推薦・併願優遇の内申基準を復活させ、単願推薦の加点上限を上げたところ推薦入試59人23.0%増、一般入試271人54.5%増となりました。青稜は前年度朋優学院の人気に押される形で応募者減、2023年度は朋優学院が応募者を大きく減らしましたがその流れを受けきれず微増にとどまりました。

前年度新設した国公立TGコースが人気を集めた朋優学院は、2023年度国公立、特進の推薦基準をアップ、併願優遇でも特進の基準をアップし国公立の基準を廃止しました。その結果、推薦入試91人51.1%

減、一般入試 808 人 25.1%減となりました。基準アップだけでなく、併願優遇で不合格者を出していることが敬遠されたかと思われますが、依然高い人気を保っています。国公立 TG の合否判定の対象となる 5 科型入試応募者数は前年度の 1130 人から 887 人に減少、国公立 TG の実質倍率は 12.86 倍から 5.29 倍へと緩和しました。

<進学校の状況>

学校名	推薦受験者				一般応募者			
	2020	2021	2022	2023	2020	2021	2022	2023
錦城学園	240	95	121	162	496	182	245	328
東洋	581	517	256	315	1,026	914	497	768
青稜	—	—	—	—	866	1,417	983	992
朋優学院	76	133	178	87	1,929	2,249	3,215	2,407
駒場学園	151	141	111	93	1,671	1,180	1,224	1,085
駒込	506	485	473	357	698	636	615	432
SDH 昭和第一	195	158	158	175	712	617	634	660
豊島学院	152	173	197	137	735	889	1,010	830
豊南	154	195	206	192	771	738	842	993
桜丘	247	243	508	129	427	373	820	106
岩倉（普）	174	146	187	217	765	658	737	928
関東第一	804	638	682	896	1,533	1,388	1,669	1,869
八王子学園八王子	—	—	—	—	1,344	1,104	1,544	1,769
八王子実践	185	171	111	121	2,219	1,717	1,504	1,811
昭和第一学園（普）	157	190	190	198	1,726	1,995	2,736	2,959
聖徳学園	25	35	32	28	302	318	473	535
錦城	208	160	153	137	1,276	1,208	1,196	1,459
大成	213	237	215	185	831	851	803	748

駒場学園は前年度までの併願優遇において神奈川県内公立中学校在籍者に対して 2 年次と 3 年次の内申点を合算する形式の内申基準を設定していましたが、2023 年度は東京都内公立中学校在籍者と同じく 3 年次の内申点のみが対象となりました。推薦は 18 人 16.2%減、一般は 139 人 11.4%減でした。推薦は減少が続いています。駒込は定員を 240 人から 200 人へと減らし、1/22、23 の二日間行っていた併願推薦を 1/22 のみとし、国際教養の 1 回目の一般入試日を 2/10 から 2/11 に変更しました。また、理系先進と国際教養は単願推薦の基準を緩和し、特 S と S は単願併願ともに基準を上げました。その結果、推薦入試 116 人 24.5%減、一般入試 183 人 29.8%減となりました。特 S、S は単願推薦がそれぞれ半減、一般も 3 分の 2 程度になりました。SDH 昭和第一は一般入試 2 回目の日程を 2/18 から 2/17 へと変更しました。推薦入試は 17 人 10.8%増、一般入試は 26 人 4.1%増、一般 2 回目の応募者数は 17.5%伸びており、一般入試での受験校を増やす今年度の傾向がここにも表れています。

豊島学院はスーパー特進以外の各コースの推薦、併願の基準を上げ、スーパー特進を加点制度の対象から外しました。その結果、推薦入試は 60 人 30.5%減、一般入試は 180 人 17.8%減でした。豊南は推薦入試 14 人 6.8%減、一般入試 151 人 17.9%増、推薦から一般へとシフトし、一般には豊島学院から

の移動があったと思われます。

桜丘は前年度に大幅な定員超過, 2023年度は定員厳守のため大幅な募集要項の変更を余儀なくされました。まず定員を280人から180人にまで減らし, 推薦入試では各コースとも内申基準を大幅に上げ, 一般入試ではSコース, Aコースが基準アップ, Gコース, Cコースは内申基準をなくし入試得点での選考になったほか, 加点幅も縮小, さらに一般入試の5科型をとりやめました。その結果, 推薦受験者は約4分の1に, 一般応募者は約8分の1に減りました。次年度以降どのような定員, 内申基準を設定するのか注目されます。

岩倉は前年度にコース制をやめ, 一日当たりの授業時限数で分けた募集を始めたところ, 応募者数が伸びています。推薦入試30人16.0%増, 一般入試191人25.9%増, 一般は共学化した2014年度以降で最多でした。**関東第一**は推薦入試214人31.4%増, 一般200人12.0%増となりました。推薦受験者の内訳をみると単願は25人減って併願推薦が大幅に増えており, 千葉県からの流れがあったかと思われます。都内生に限って見ると, 推薦から一般へシフトした動きと言えそうです。

次に多摩地区です。**八王子学園八王子**は文理コースに特選クラスを新設し, 選抜クラスを進学クラスに統合しました。特選の応募者は323人で全体としては225人14.6%増, 新設クラスが歓迎された模様です。**八王子実践**は推薦入試10人9.0%増, 一般入試307人20.4%増, 推薦は前年度総合進学基準を上げて受験者減となっていたところからやや盛り返した形です。**昭和第一学園**は推薦入試8人4.2%増, 一般入試223人8.2%増。前年度に工学科を募集停止し普通科のコース改編を行って一般入試が大幅増になっていたところからさらに増えた形です。**錦城**は特進コースの推薦入試をとりやめ, 進学コースの推薦定員を増やしました。その結果, 推薦入試は16人10.5%減, ただし進学コースに限ると8人増, 一般入試は263人22.0%増となりました。これら多摩地区の進学校では併願優遇制度を利用する際, 他の私立を私立第一志望としてもよいとする学校が多く, 一般入試の受験校を増やす流れの中で併願優遇の応募者増となった学校が多かったようです。

4. 入試トピックス

地区	学校名	内容
港区	正則	2024年度より推薦C(併願推薦)を廃止
大田区	蒲田女子	2024年度より男女共学化, 校名を「羽田国際」に変更
世田谷区	日本学園	2024年度よりスポーツコース募集停止
中野区	新渡戸文化	2024年度より音楽コース募集停止
文京区	広尾学園小石川	2024年度より高校募集停止
文京区	京華女子	2024年度より京華, 京華商業のあるキャンパスに新校舎を建設し移転
豊島区	城西大学附属城西	2024年度より「普通クラス」を「アカデミック&クリエイティブクラス」に名称変更
墨田区	安田学園	2024年度より進学コース募集停止
葛飾区	共栄学園	2024年度より「未来探究」「理数創造」「国際共生」「探究特進」「探究進学」の5コースに改編
八王子市	明治大学付属中野八王子	2024年度より校名を「明治大学付属八王子」に変更
立川市	昭和第一学園	2024年度よりデザインコース新設
東久留米市	自由学園	2024年度より男女別学から共学化, 単位制を導入
武蔵野市	聖徳学園	2024年度よりデータサイエンスコース新設